

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

ウサギ～命と向き合う～／富田林市立青葉丘幼稚園（大阪府）

みなさんの園では、どのような生き物との関わりがありますか？

本事例は、ウサギを飼育している園の実践です。

日々、ウサギと関わる中で愛着をもち、興味を深め、生き物の立場に立って考える子どもたちの姿から「科学する心」の育ちを捉えることができます。

園は、日頃から専門家との連携を図り、意欲的に生き物に関わる子どもたちの体験を支えています。



● ウサギとの関わり／4歳児

✦ ウサギのチョコちゃんかわいい／11月

- ウサギ小屋の汚れがウサギにとってどんな気持ちなのかに気づいてきた子どもたちは、2学期は自ら「掃除をしてあげたい」という心の動きが見られてきた。また、世話の積み重ねで、ウサギを抱っこできる子どもが増えてきた。「怖い」と言っていた子どもも撫でようとする姿が見られ「かわいいな」と愛情をもって関わりを楽しみ始めた。
- 日差しが強い日は小屋を日影に移動させるなど、「熱中症」「水分補給」という保健教育で知り得たキーワードを思い出し、自分たちだけではなく、飼育動物に対しても「どんな気持ちだろうか」と考えながら関わろうとする姿が見られた。
- 2学期後半、子どもたちは、ピオトープに生い茂っていたウサギの大好きなクローバーが少なくなってきたことに気づく。今まで、チョコちゃんのご飯は「ピオトープにある」と思っていた子どもたちだが、「他にどんなものを食べるのか」を図鑑で調べる姿もあった。
- ウサギが食べる野菜がいろいろあることを知った子どもたちは、家庭から野菜をもって来てくれるようになった。大きめの野菜はウサギが食べやすいようにと手でちぎっていた。
- 子どもたちは、5歳児の遊びに刺激を受けて、お料理作りを楽しみ始めた。その様子を見て、保育者は、ナイフやトングなどを用意した。
- 子どもたちが、「チョコちゃんのごはん持ってきたから切りたい！」「もも組キッチンや」と、早速ごはん作りを始めた。保育者や友達の誘いからなんとなく一緒に小屋の掃除をしていた子どもも、ごちそう作りは「僕もやりたい」と意欲的な態度を見せる。（全員が、夏休みの飼育当番活動でごちそう作りの経験をしているので、楽しさを味わっていることも要因ではないだろうか）
- 遊びの流れからのごちそう作りであったが、子どものやりたい遊びから意識を向けていき、ウサギと関わろうとする環境の再構成について考えさせられた。
- 飼育小屋の掃除では、「そっち持っという」「新聞紙取ってくるわ」など自分たちで役割分担をしながら進めていけるようになった。保育者が、「任せてもいいかな？」と投げかけ見守っていると、張り切って自分たちで進めていた。



✦ ウサギのチョコちゃん、早く元気になって！／12月

- 世話をしている時に、「なんか、チョコちゃん首を傾けてるな…」とみんなが気づいた。
- その後も、チョコちゃんの異変に気づく。チョコちゃんの首が90度近く曲がりしんどそうだったため、普段から連携をしている地域の動物病院を受診することにした。結果は脳炎の可能性が高く、寿命は短いと診断された。
- 降園してからもチョコちゃんのことを心配していた子どもたちは次の日、登園するなり「チョコちゃんは？」と、様子を見ていた。
- クラス全員に病気のことを話している間、うまくバランスが保てないチョコちゃんはクルクルと回っている。その姿を見て「なんか楽しそう！」と笑う友達もいる中、「チョコちゃん病気やけど本当は元気なの？」と、心配のつきない子どもたちだった。
- そこで保育者は、『首が曲がっているから立とうとすると回ってしまうこと、回りすぎると目眩でしんどくなること、毎日薬を飲まなければいけないこと』などの医師の言葉を知らせた。
- 状況を知った子どもたちの表情が一気に変わった。
- 一人一人の心に何か響いたのか、その後は、それぞれの関わり方で、心配したり、喜ぶことをやってあげたいと考えたりするようになった。
- 「ウサギの絵本を読んだら元気になるかも！」と、チョコちゃんに絵本を読んであげる子ども、クルクル回り出すと「大丈夫？しんどい？」と声を掛ける子ども、優しく撫でる子どもの姿があった。
- 特に、注射器で薬を飲んだ後は、「偉かったね、ご褒美のニンジンやで」と、今まで以上にチョコちゃんのことを思っていて関わろうとする姿が見られるようになった。命あるものを飼育することの、楽しさや難しさをチョコちゃんを通して学んでいる子どもたちだった。



✦ 元気になったチョコちゃん／2月

- 約2ヶ月に及ぶ子どもたちの献身的な看病の甲斐もあって、チョコちゃんは元気に回復してきた。生活発表会では、絵本『あしたもともだち』を題材にした劇をすることになった。オオカミが腰を痛めたクマの看病をする内容だが、まさに、今の子どもたちの姿と同じであることをみんなで共感し合った。
- ウサギのチョコちゃんに注射器で薬を飲ませて、「偉かったね、ご褒美のニンジンとラディッシュやで」と日々、チョコちゃんに関わっている子どもたちの姿を、そのまま劇の中で表現した。また「ウサギのチョコちゃんも劇に登場させよう！」ということになり、人懐っこく大人しいチョコちゃんも、当日は参加した。
- ウサギのチョコちゃんに、一人ずつ声を掛けるアドリブのシーンでは、「チョコちゃん、大好きだよ」「ご飯をたくさん持ってくるからね」「病気、しんどかったでしょ」など、自分の気持ちをチョコちゃんに伝えていた。今までチョコちゃんに関わってきた子どもたちからの愛情が伝わってくる姿であった。
- チョコちゃんが元気になったことを動物病院に知らせるため、子どもたちと手紙を書き、届けると大変喜んでくださった。

● その後

子どもたちの看病で奇跡的に元気になったチョコちゃんは、子どもたちが5歳児になって10月のこと、赤ちゃんを出産した。



● 感じる心・考える力（試行・判断）

生き物との関わりの積み重ねで、子どもたちが愛情をもって、生き物の気持ちを考えながら関わろうとする心の育ちが感じられた。初めは、生き物に抵抗のある子どももいたが、保育者や友達の行動がモデルとなり、愛情をもってかかわる姿に変容していった。

● 自分と向き合う力（自己自立）

比較的大人しく、人に攻撃しないウサギであることもあり、抱っここの仕方を知らせると、「抱っこしたい」「なでなでしてみる」と、自ら関わる姿が見られるようになった。今までのいろいろな活動過程において「やってみたらできた」という自信からくる姿ではないかと思われた。

● 他者とのかかわり（コミュニケーション力）

餌の野菜を切るごちそう作りでは、ウサギの喜ぶご飯を想像しながら、楽しく活動していた。自ら気づいたことを、楽しみながら「やってみよう」とすることの大切さを感じる。

飼育小屋の掃除は、自分たちで役割分担をしながら進めていけるようになった。保育者の「任せる」という投げかけは、自分たちだけで頑張る！任せられた！という責任感が芽生え、意欲につながっている。